虚子記念文学館投句特選句・令和三年八月

稲畑汀子　選

記念樹に迎へられたる秋涼し　新潟　安原　葉

初秋の風を残して庭師去る　大阪　辻　昌子

緊張の風をなだめてゐる団扇　兵庫　山田佳乃

秋立つや業平橋のたもとにも　兵庫　阿曽宏之

立秋とそつとささやく風の息　兵庫　池田雅かず

忙しき日々に区切の文月かな　兵庫　塚本武州

秋茄子の籠をはみ出す色と艶　兵庫　福間笙子

香まとふ葉書の届く文月かな　兵庫　武田奈々

オリンピック大歓声の蝉と母　兵庫　榊原彩羽（青少年）

まんまるを手に取って嗅ぐ青蜜柑　兵庫　菅原一真（青少年）

入選句・令和三年八月

寄せて引くさざなみのごと踊の輪　兵庫　武田優子
野分連踊る阿呆となりし夜　兵庫　涌羅由美
手解きの指のやさしく踊かな　兵庫　河野ひろみ
南瓜分けほくほく煮物夕げかな　兵庫　近藤ゆき
背の光る方が勝者や兜虫　兵庫　吉村玲子
大西日空を飛ぶ夢海の夢　兵庫　岸川佐江
輝ける五輪の汗の美しく　兵庫　奥田好子
鳩吹くや水琴窟の音色澄み　大阪　山田　天
洗はるるものに心も滝白し　兵庫　永沢達明
秋立つやホットコーヒー注文す　兵庫　槌橋眞美
海を見て子等を見守りゐる日傘　石川　辰巳葉流
朝顔や縋るものなき蔓の先　兵庫　高橋純子
母は娘を娘は母思ふ夏の月　兵庫　中井陽子
立秋や照る階を俳磚へ　大阪　辻田あづき
展示見しよりの親しき秋の蟬　大阪　林　曜子
墓参父母の享年若かりし　奈良　好川忠延
新秋や山湖に黙の戻り来し　兵庫　小杉伸一路
掃苔や声なき声と対話して　兵庫　岩水ひとみ
伝へたき金魚掬ひの祖母のこつ　兵庫　深尾真理子
迅雷の先駆けなるや雲動く　奈良　堀ノ内和夫
初秋や朝の厨に通る風　兵庫　金田八江子
逃げまどふ方へ方へと追ふ花火　兵庫　三木雅子
手花火を見て雑念を遠ざける　兵庫　山口弘子
手花火の赤青黄色顔を染め　兵庫　入谷千惠子
初秋の淡き浮雲山の端に　兵庫　山岸正子
ポストまで二分も遠し炎天下　兵庫　道中義臣
ハンモック揺るる大地や森の風　奈良　芳林淳子
集りは線香花火をしめとして　兵庫　山崎渺美

手花火のつひの火玉や忌明けぬ　兵庫　伊藤秀子
目覚むれば初秋の風遊ぶ庭　兵庫　大西美知子
模様替へして新秋の館の庭　兵庫　玉手のり子
初秋の風に落ち着く心かな　大阪　綿谷千世子
新涼の風吹き抜ける松林　兵庫　藤井啓子
まだ見えて夫の流灯月のぼる　兵庫　二瓶美奈子
トンネルを抜けてなほ咲く曼珠沙華　兵庫　高市敦之
霊験の水も甲斐なく盆の月　和歌山　中島走吟
スケボーのぐるりの見せる夏天かな　神奈川　小堀公美子
改めて受け継ぐ重さ終戦日　兵庫　田村惠津子
沖縄の唄声秋の海の波　京都　杉森大介
人が人さそひ広ごる踊の輪　石川　辰巳昌彦
曽祖父の句をたどり来し夏休み　兵庫　菅原理代
天あふぐ十字に組みし蝉の脚　愛知　小野　薫
古壷新酒とある扁額新酒酌む　石川　伊東弥太郎
生も死も覆ひ尽くして法師蟬　神奈川　平野孤舟
渋皮を余せる母の栗ご飯　兵庫　キートスばんじょうし
ベランダに淡き色増え秋隣　埼玉　土井洋子
空蟬のしがみつきたる細き枝　東京　宮村土々
夕暮れを率ゐて飛ぶや赤蜻蛉　神奈川　金子三奈乃
バーボンの氷の音や原爆忌　東京　木村三球
ゆつくりと席うまりゆく残暑かな　神奈川　進藤剛至